



・「主人の心臓血管手術を車で運んで」

一月一日今雑煮を食べているこの家族に何の罰が家を横切っていったのでしょうか。東京の次男が、胆石で愛大に十月二十五日に入院をしました。そして、二日目の夜、見舞いに行き話をしていると、主人がいなくなり、トイレでもどしたので早々「また来るね、大事にね」と車に乗り込みました。

途中主人の様子がおかしくなり、すごく騒ぎだしたのです。森林公園まで来た時「もう駄目かもしれん、早く蒲団の中に入りたい」と何度も言うのです。何が起きたのか、私には分かりません。「お父さんしっかりして」と、左手で冷たい主人の手を握り、右手でハンドルを握り必死で運転をしてきました。そうだ、掛かり付けのお医者さんに診てもらい注射してもらったらきっと直ると、八時五分に門を叩きました。主人と3m位離れていましたが、徳洲会へ行かれたらと言って下さいました。それでも「蒲団の中に入りたい」の繰り返し、そんな気持ちを振り切り家を通り過ぎ、徳洲会に入りました。そこには主人を待っていてくださったかのように大橋先生と外科の先生が見えたのです。

「よくここへ連れてくることを判断したね。又、本人も良く辛抱したね。心筋梗塞です。すぐ手術（カテーテル）をします。」と言われました。びっくりして体が震え始め、言葉すら出てきません。茫然と立ち主人を見送ったのです。先生方の努力で手術も無事終わり、集中治療室の看護婦さんにも良くしていただき、三日目に病室へ入りました。そして、四、五日して次男が手術をしました。胆石とは言え、全身麻酔で手術室に入る姿は、身を切られる思いでした。経過も良くなりホッとしたとき、大橋先生から、バイパスの手術の説明を聞きました。仕事が心配でなかなか「うん」といわない主人をみんなで説得しお願いしました。

どうしてこんなに不幸が続くのかと枕が涙で濡れ、眠れない毎日でした。

「つらいことが多いのは感謝しないからだ」

「悲しいことが多いのは、自分のことしか分からないからだ」

「心配することが多いのは今を懸命に生きていないからだ」

そんな、誰かの言葉を思い浮かべました。みなさんに助けていただき、主人も日に日に良くなり二ヶ月の病院生活を終え今日を迎えました。

これも昼夜やっていただける徳洲会病院、そして一生懸命に尽くして下さいました素晴らしい先生方、看護婦さんみなさんのお陰です。本当にお世話になり感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

どうか名古屋徳洲会病院にいつまでも居て下さいね。



・「妻の立場から」

生来、心身共に頑健な主人が降って湧いた様な冠動脈バイパス手術を受けることになった時、私は割に冷静でした。というのも本人は至って元気でした。（発作の苦しい時を目の当たりにしていない）手術の決断をしても、まことに落ち着いていて、今の医療技術への全幅の信頼を繰り返し聞かされていたからでした。

しかし、手術日が決まってからの十日間は長く感じ、ベッドで元気な主人を毎日見舞う私の方が参ってしまいました。

当日は暖かく穏やかな晴れた日でした。娘と控え室で待つこと八時間。それでも交代で昼食をとり外出して、「今頃は心臓を止めて・・・」と病院の手術室を眺めたりしました。長閑な春の日をこの様に切羽詰まった気持ちでいるのが嘘のようでした。

予定より三十分早く控え室の電話が鳴った瞬間は「成か否か」と受話器をとる短い間に色々な思いが交錯しました。無事終了の言葉と面会にということで集中治療室へ入りました。大橋先生から簡単な手術経過をお聞きし、万感の思いを込めてお礼を申し上げました。お疲れの様子も見せず温和な先生のお人柄に接し、心底信頼して良かったと思えました。

夜、学童のいる娘を帰宅させ、私一人控え室で待機いたしました。あの控え室は実に安らげる場所でした。主人と同じ病院内にいて、先生方スタッフが万全を期して下さいていると思うと安心して睡眠剤を飲んで眠れました。朝八時の面会時間を待ちかねて入室すると主人はもう麻酔から醒めていて、不自由ながらも口も利けました。お陰様で順調に快復し、今頃は以前にもまして趣味三昧に生きて居ります。

大橋先生はじめスタッフの方々看護婦の皆様、その他大勢の方々に心より感謝致して居ります。金品の授受は決して許されぬ病院ですから、私どもの感謝の気持ちはこうした文章に書くことしかできませんが、これはどの様に書いても書き尽くせません。

今、こうして十ヶ月前の事を振り返ってみますと、とにかく先方を信頼してお任せして本当に良かったと思えます。信頼が安心を呼び心静かに大事を受け止める事ができ、そして、「結果」良かったです。

「ハート通信 創刊号」のスタッフ紹介の写真を眺めながら、皆さんお若いばかりで驚きました。これが徳洲会の力なんだと感じ入って居ります。徳洲会の理念通り今後も、私ども病人の為に素晴らしい医療をお願い申します。（身勝手ですね）そして幾末永く「名古屋徳洲会総合病院」にいらして下さい。他の所に行かないで下さいね。心よりお願いします。

最後にもう一度ありがとうございます。万感の思いをこめて。



・「心臓バイパス手術を受けて」

私は心臓バイパス手術をするまでは「健康保険証は妻の為のもの」という程の丈夫な身体でした。五年前のリタイア以後、海釣り、麻雀・囲碁・レジャー農園等々趣味に多忙で過ごしていました。ところが昨年の四月、鯛を夢見て出掛けた海釣りの時の事です。車中で仮眠から目覚めると頭がふらふら、胸も苦しく海釣りどころではありません。暫く休んだあと「過労かな」と高を括り、イカ釣りの漁火を眺めていたのですが、今思うとあのままあちらへ行ってもおかしくなかったのです。幸い四時間の帰宅では何の異常もなく無事帰宅しました。しかし翌日のレジャー農園で中腰になった際、再び胸が万力で締め付けられるように苦しくなり、休日対応の良い徳洲会病院へ駆け込んだ訳です。そして、当直医の進先生に心電図を取っていただき「いつ発作が起きてもおかしくない状態」なので即入院となりました。翌日には大橋先生に最新機材で診察していただき、自分の動く心臓を見ながら冠動脈の話まり具合等の説明を受けました。又、手術しなれば好きな海釣りもレジャー農園もできないという話を伺い、「それなら全てを大橋先生にお任せしよう。」と決心をしたのです。手術前数日間は道具を使って深呼吸の練習をしたり、いただいた術前、術後の注意事項等のマニュアルを読んだりして過ごしました。大橋先生を筆頭に、看護婦さん、メディカルエンジニアの皆さんのお陰で無事手術も終わりました。（何も覚えていませんが）術後は十日間の点滴とおかゆ食で、四kg減量しましたが、あの少ない食事でも生活するには十分なんだと知り、今までの過食と脂質の摂り過ぎを反省する事しきりでした。それから、入院当初よりソーシャルワーカーの方に懇切丁寧に説明していただき、高額治療給付等の手続き等も早々に出来ました。お陰で退院時には手術代、入院費等の自己負担は少額で済み本当に助かりました。現在は傷害者手帳を持ちながらも以前より元気一杯で、本当に皆さんに感謝しています。ありがとうございます。



・「執刀」以外の治療について思ったこと

「父の心臓の具合が悪い」と母から聞いたのは去年の四月です。

父は物事に動じるという事が全く無く（！）又、自分の人生の決断を母や私に相談するタイプでも無いので（身勝手？）独りでさっさとバイパス手術を受けることに決めてしまいました。（このことは家族の者にとって精神的にもとても楽でしたが）とは言っても、それが八時間もの大手術と聞けば家族としてはとても不安です。そして、その不安は「何も知らない、よくわからない」ことが原因なのです。

しかし、父の手術に限っては、十分なインフォームドコンセントのお陰で安心してお任せすることが出来ました。このインフォームドコンセントは、大橋先生と田崎婦長、そして私たちの計五人で行われました。ホワイトボードを使った先生の絵入りの説明は、本当にわかり易いものでした。父の心臓はどこがどの様に詰まっているのか、どこをバイパスするのか。又、バイパスには手足の静脈を二十cm程使う事、心臓は停めてどうするのか、心臓手術は出血が少ないので輸血はしなくて済むだろう事、術後の痛みは少ない事、手術のリスクについて等。とにかくどんな些細な質問にもわかり易く丁寧に答えて下さるのです。

世間には「手術さえ成功すれば文句は無いだろう」という様な病院もあると聞きます。何が不安かは人それぞれでしょうが、病人とその家族の両方の不安を取り除くという事も治療の一環ではないでしょうか。薬や手術以外、十分に話を聴き質問には答えて下さる、ということが「安心してお任せする」信頼関係の基となるのです。

父は後遺症もなく本当に元気になり、老後を謳歌しています。一見したところ十ヶ月前に大手術をしたとは信じられません。

けれども腕や足のステッチを見ると、大橋先生のして下さいました手術そのものよりも、術前のあの質疑応答を思い出して、本当の治療について考える私です。

又、ハート通信を拝読してメディカルエンジニアの皆さんにもお世話になったんだと、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

大橋先生、田崎婦長さん、お身体はくれぐれもお大事に下さいね。ありがとうございました。



・「ペースメーカー手術を受けて」

私は突然胸の激痛を受け、急ぎ徳洲会に入院させて戴きました。一年半前位から胸の圧迫感があり、時に短く意識が切れる時がありました。近くの開業医にお願いして診てもらい、不整脈と診断・治療の後、段々激痛が少なくなってきていた時でした。

突然の胸痛で病院の集中治療室に入院、何から何まで面倒を見てもらい、二日後手術が始まり、検査棒（？）を手首から差し入れ胸の血管映像を映し出す。しかもその映像を見て初めて見て何か、ふの抜けたくらげ（言いようがわからない）の様でした。先生方の判断ですぐ手術、顔面を覆い、麻酔でわからないうちに、痛みもなくペースメーカーが埋め込まれ手術が終わりました。病室に再度戻り看護婦さん達の手厚い看護を受けましたが、翌日には一般病棟に入り自由に排便、思うように動け、その上看護婦さん達の面倒には今思っても感謝の気持ちで一杯です。何かお礼をと思いましたが病院の規則で出来ないことを知り気持ちだけでと、本当に心苦しく思います。有り難うございました。私は身体に生命を延長させるためペースメーカーが入りました。これからも先生方の御面倒をお掛けしますが宜しくお願い致します。特に大橋先生には色々御面倒を掛け有り難く思います。先生の配慮により落合先生も快く面倒を見て下さいます。今後とも宜しくお願いします。婦長さんも元気で今後ともよろしく。私達老人は、時代の推移と共にその技術の進歩が急速していることをしみじみ思います。では。



・「こちらICUです」

手術室の右隣の大きな鉄の扉を押し開けてみてください。ここがICUです。救急車で搬送された重症患者様、一般病棟で状態の大きく変わった患者様、大きな手術を終えられた患者様と中はごった返していますが、私達スタッフは常に冷静に看護にあたっています。

みなさんの手術の予定が知らされるとそれまでの間に検討会を行い、当日をむかえます。当日、手術室からの連絡を受けるとちょっとした緊張が走ります。

多くのチューブ、機器と共にICUへ戻ってみえるとき、「お疲れさま」「終わりましたよ」と思わず声がかかります。それから、数分後には首を長くして待ってみえる家族の方と面会していただきますが、まだ麻酔の醒めない状態なので、目がしっかり開いた時もう一度会っていただきます。家族の方にもやっと一安心していただけます。

その後、数日間を私達と一緒に過ごしていただきますが、病棟にあがっていただく頃には点滴もなくなり、食事も食べられるようになって、洗面台へも歩いていけるぐらいになります。

皆さんの闘病生活の中のほんの数日間ですが、手術後のみるみる回復される過程をご一緒に、元気になられた姿を外来や院内でお見かけする時、もう一度私達の話題になります。

私達は、常にICUという特殊な環境においても、患者様と家族の方々に安心して治療を受けていただける様、看護に当たっていきたくと考えています。

四月の線路沿いの桜の花が満開の時には、ベットの位置を大きくづらし、花見もします。街灯に照らし出された桜の花は、絶品ですよ。